

根々井居屋敷遺跡III

長野県佐久市根々井 根々井居屋敷遺跡III発掘調査報告書

2024.3

佐久市教育委員会

例 言

1. 本書は、有限会社平和住宅が行う(仮称)ビースタウン根々井宅地造成工事に伴う根々井居屋敷遺跡IIIの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 有限会社 平和住宅 代表取締役 永井拓也
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 根々井居屋敷遺跡III(N I Y III) 200m²
5. 所在地 佐久市根々井字屋敷574-1・2・3
6. 調査期間 令和4年10月5日～27日(現場発掘作業)
令和4年10月～令和6年3月(報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。
9. 陶磁器の鑑定は(一財)長野県埋蔵文化財センター 市川隆之氏に依頼した。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・土坑(D)・溝(M)・堅穴状遺構(Ta)・ピット(P)である。
 2. 掘図の縮尺については、掘図中にスケールを示した。
 3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
 4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
 5. 掘図中のスクリーントーンは以下のことを示す。
- | | | | | | |
|--|-------|--|------------|--|-------|
| | 地山 | | 須恵器 | | 焼土・赤彩 |
| | 灰釉・貼床 | | 粘土・黒色処理・磨り | | |

目 次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

1. 立地と経過
2. 調査体制
3. 調査日誌
4. 遺構・遺物の概要
5. 標準土層
6. 調査の方法

第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 堅穴住居址
2. 堅穴状遺構
3. 土坑
4. 溝状遺構
5. ピット

第Ⅲ章 調査の総括



第1図 根々井居屋敷遺跡III位置図



発掘調査状況

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

1. 立地と経過

根々井居屋敷遺跡Ⅲは、佐久市根々井に所在し遺跡範囲の南よりに位置する。調査地点は湯川により形成された低い台地上の縁近くに立地する。遺跡周辺の海拔は667m前後を測る。

本遺跡の周辺は、埋蔵文化財発掘調査の実績が乏しい地域であるが、今回の調査地点に近接して根々井居屋敷遺跡Ⅰ、根々井居屋敷遺跡Ⅱがある。いずれの遺跡からも弥生時代～平安時代の遺構が検出されている。また、北側の台地上縁には、いわゆる「流山」を利用した根々井大塚古墳が立地する。根々井大塚古墳は、流山山頂の一部を利用して作られた弥生時代末～古墳時代初頭の「墳丘墓」的な墳墓であることが判明しており、佐久地域においては希少な事例となっている。

今回、遺跡内において有限会社平和住宅により宅地造成工事の計画がされ、市教育委員会を通じ県教育委員会に文化財保護法93条の届出があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行い、その結果から遺跡の保護措置がとれない道路工事部分で記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。

なお、発掘調査に当たっては開発関係者・地権者・隣接住民の方々に多大なるご理解とご協力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

2. 調査体制

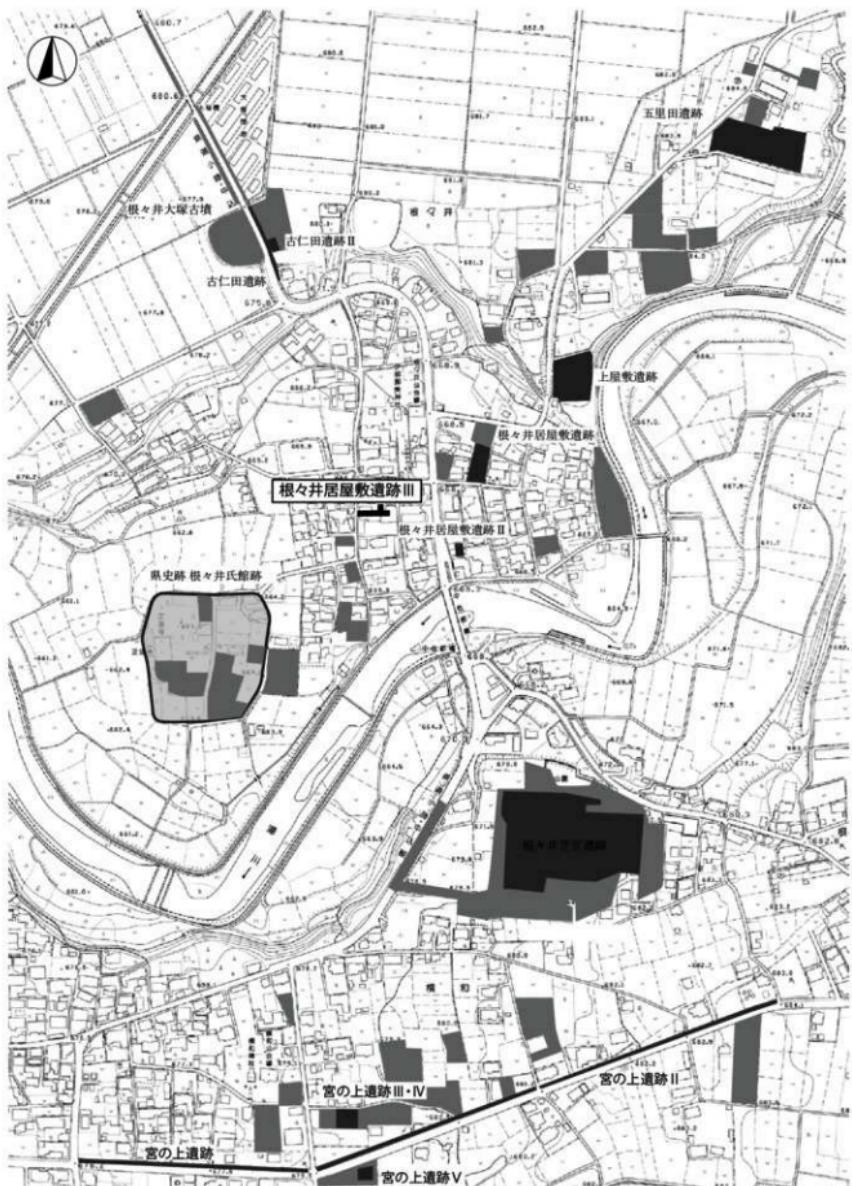
調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	吉岡道明
事務局	社会教育部長	土屋 孝(令和4年度)	依田 誠(令和5年度)
	文化振興課長	中沢栄二	
	企画幹	井上 剛	
	文化財調査係長	山本秀典	
	文化財調査係	小林眞寿	富沢一明 上原 学 久保浩一郎 松下友樹
調査員	小林妙子	田中ひさ子 大矢志穂 堀篠保子 箕輪由紀	
	原 圓子	堀篠まゆみ 小林敏雄 岩松茂年 桐原久人	
	赤羽根篤	小池長信 由井洋一	

3. 調査日誌

令和3年4月15日	有限会社平和住宅より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
4月16日	長野県教育委員会へ市教育委員会より3佐教文振第1050-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
4月22日	長野県教育委員会より3教文第7-116号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
令和4年9月1日	佐久市教育委員会により試掘・確認調査の実施
令和4年9月5日	有限会社平和住宅より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
9月7日	佐久市教育委員会より見積回答
9月15日	有限会社平和住宅と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結
10月5日～27日	記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成業務を行う。
令和6年3月	調査報告書を刊行する。記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

4. 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址8軒(弥生～平安)	竪穴状遺構1基	溝状遺構1本	土坑5基
遺物	弥生土器(箱清水式土器)	土師器	須恵器	灰釉陶器 陶磁器類 石製品



第2図 周辺遺跡位置図

5. 標準土層

今回の調査地点は、南西方向に僅かに傾斜する沖積微高地上に立地し、遺跡の基本層序は5層に分かれます。

第Ⅰ層 盛土

第Ⅱ層 (10YR4/1)褐灰色土(耕作土)

第Ⅲ層 (10YR2/1)黒色土

第Ⅳ層 (10YR5/6)黄褐色土(黄色シルト層)

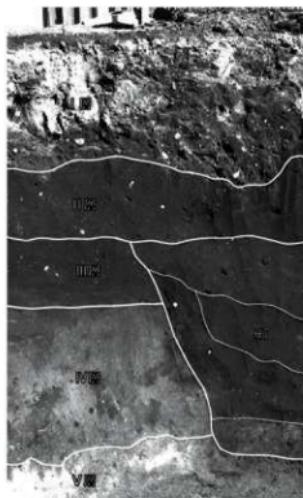
第Ⅴ層 (10YR7/1)灰白色土(砂層)

遺構確認面はⅢ層上面である。今回の調査地点では、Ⅲ層の黒色土は南西に向かって厚く堆積しており、調査区北側のエ-3Gr付近ではⅡ層下にⅣ層の黄色シルト層が検出されている。

また、M 1号溝状遺構の底面ではV層の砂層中に拳大から人頭大の川原礫が入った状態で確認されており、地点により地山の内容が異なる沖積地特有の状況を示していた。



調査区遠景(中央の林が伊邪那美神社)



標準土層



第3図 調査全体図 (1:250)

6. 調査の方法

遺構調査・遺構測量

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図とともに調査区内に設定した基準杭を利用した造り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手でおこない、室内乾燥させた。注記は白色のポスターカラーによりを行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエボキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。遺構図面は1/20で測量実測した図を1/40で修正し、遺物は1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真是、デジタル一眼カメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーりバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真是デジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書掲図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。

第II章 遺構と遺物

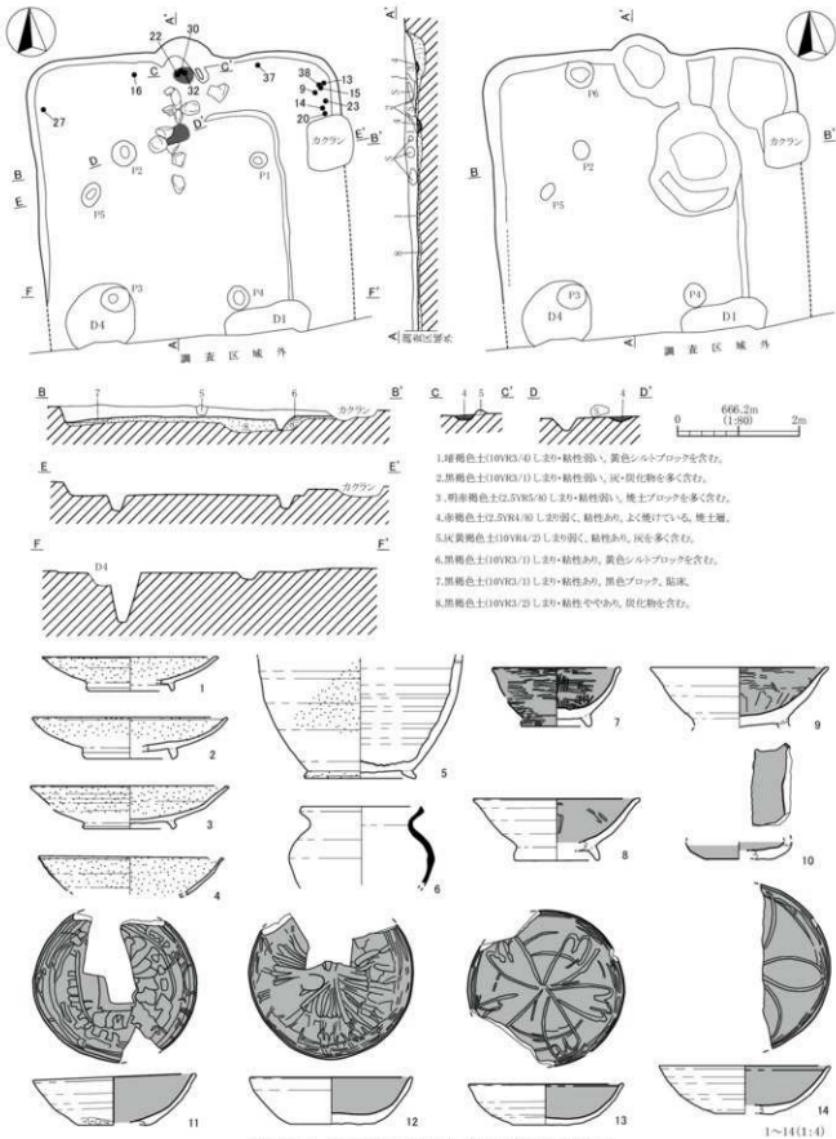
1. 壴穴住居址

(1) H1号住居址

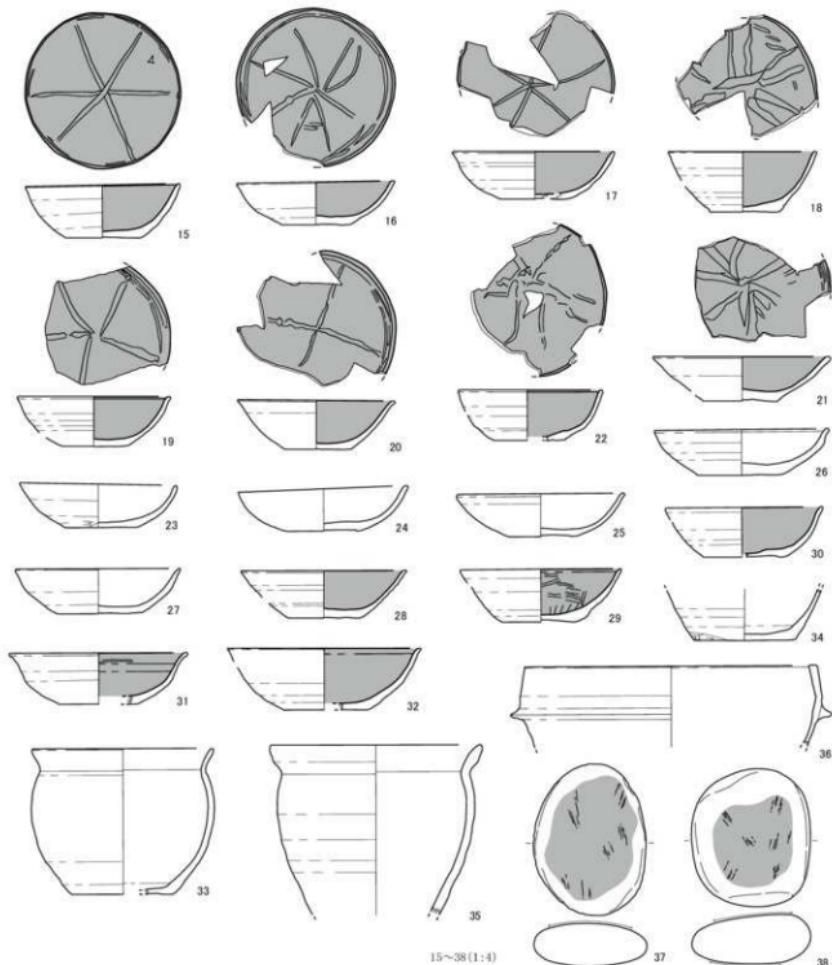
本址は調査地東よりで検出された。検出状態は住居址南側が調査区域外となる。形態は方形と考えられ、カマドは北壁で検出された。規模は検出南北長4.54m、東西長4.80mを測る。壁高さは北西コーナー付近で0.23mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-5°-Wを測る。床面積は検出部分で22.04m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に軟質であった。貼床の厚みは0.04~0.29mを測る。ビットは掘り方時も含め6ヶ所で確認された。P1からP4が主柱穴と考えられる。規模はP1が径0.28m・深さ0.24m、P2が径0.42m・深さ0.20m、P3が径0.48m・深さ0.84m、P4が径0.39m・深さ0.10m、P5が径0.40m・深さ0.29m、P6が径0.50m・深さ0.19mを測る。住居掘り方は北東コーナーから東壁内側で一段低くなる形状であり、住居中央南よりで硬質化した焼土範囲が確認された。これらの事から本址は北東方向への拡張が考えられる。

カマドは北壁に構築されていた。右袖部は一部現存していたが、構築材と考えられる川原石はカマド全面に引き出されたような状態であった。火床部は顕著で、径0.34mで焼土厚みは0.07mを測る。

出土遺物はカマド周辺を中心に床面上や覆土内より多く出土した。1~4はいずれも灰釉陶器皿である。特に3はいわゆる段皿と呼ばれるタイプの皿である。いずれも釉薬は刷毛なりと考えられる。5は灰釉陶器瓶の胴部下半から底部である。胴部と高台に釉薬が確認できる。6は須恵器甕の破片である。肩部に自然釉の付着が確認できる。7~9は土師器碗である。7は内外面を丁寧なミガキが施され黒色処理されている。10は破片資料であり、確証を得ないが土師器耳皿の一部と考えられる。胎土全体が黒色である。11~32は土師器壺である。内面に暗文風のミガキが施されているもの。また、内面黒色処理されているものなど多岐にわたる。33~35は土師器のいわゆるロクロ甕とよばれる甕である。35は胎土がよく精鍊されている。36は土師器羽釜の口縁部付近である。焼成が須恵器のような灰色を呈しており、焼成も良好である。37と38は磨り石であり、37は1面、38は2面の磨り面が確認



第4図 H1号住居址及び出土遺物実測図



第5図 H1号住居址出土遺物実測図

できる。

本址は、これらの出土遺物から9世紀後半に比定されると考えられる。

(2) H2号住居址

本址は調査地中央で検出された。残存状態は南西コーナーが後世の建物基礎により削平されていた。



第6図 H2号住居址及び出土遺物実測図

形態は方形と考えられる。カマドは北壁で検出された。規模は南北長2.81m・東西長3.25mを測る。壁高さは南東コーナー付近で0.31mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-5°-Wを測る。床面積は推定部分も含め8.71m²を測る。覆土は自然堆積である。床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.03~0.21mを測る。壁溝は北壁と東壁に巡っていた。規模は、幅0.14~0.20m・深さ0.01~0.04mを測る。住居掘り方は北西コーナーに方形の掘り込みが、南東コーナー部に楕円形の掘り込みがそれぞれ検出された。規模は北西側が長軸長1.12m・深さ0.08m、南東コーナー部が残存長軸長1.42m・深さ0.13mを測る。ピットは掘り方時も含め3ヶ所が検出された。規模はP1が径0.47m・深さ0.50m、P2が径0.35m・深さ0.26m、P3が径0.41m・深さ0.33mを測る。

カマドは北壁東よりから検出された。火床部と構築材と考えられる礫のみの検出であった。火床部は良く焼けており、焼土径は0.53m・焼土厚みは0.07mを測る。

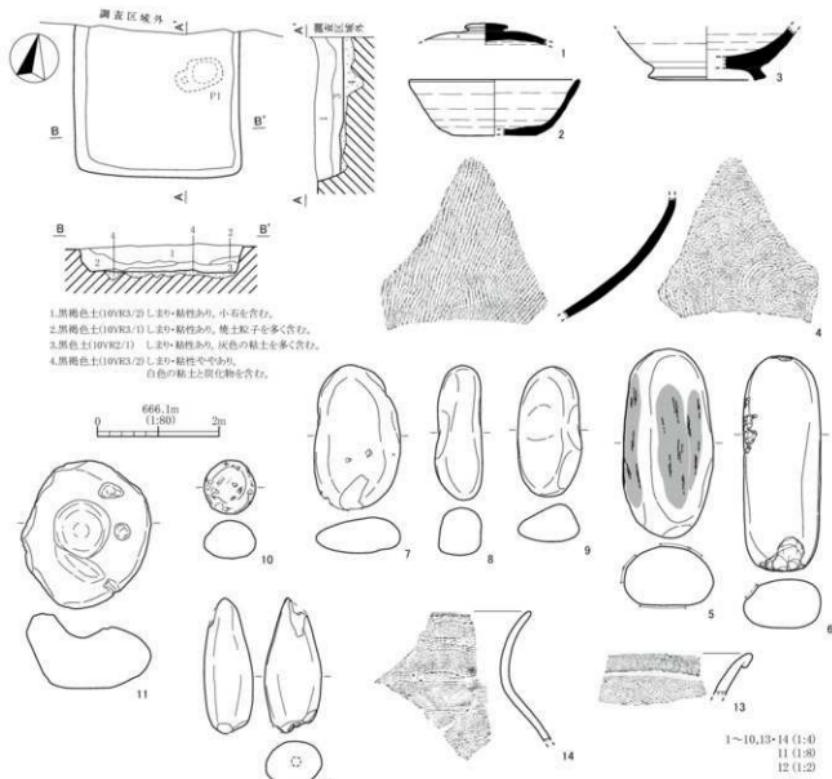
本址からの出土遺物は、覆土を中心に出土したが少なかった。4点を図示した。1と2は須恵器壺蓋である。同一個体と考えられるが接合できなかった。自然釉の付着が確認できる。3と4は土師器壺の底部付近と考えられる。いずれも外面はケズリが施されている。

本址は出土遺物が少なく、所産時期の特定は難しいが図示した遺物から6世紀代が考えられる。

(3) H3号住居址

本址は調査地中央西よりで検出された。残存状態は良好であるが、北側は調査区域外となる。形態は方形と考えられる。カマドは検出されなかった。規模は東西長2.41m・検出南北長2.25mを測る。壁高さは南東コーナー付近で0.40mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面積は検出部分で5.38m²を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であり、貼床は0.04~0.32mの厚みで貼られていた。ピットは掘り方検出時に一か所確認された。規模は径0.78m・深さ0.37mを測る。

本址からの出土遺物は少なかったが14点を図示した。1は須恵器蓋である。摘み部が宝珠状を呈する。2は須恵器壺である。3は須恵器壺の底部付近であり、内面に自然釉が付着している。4は須恵器壺の胴部破片である。外面には平行タタキ目が残り、内面には抑え痕であるいわゆる「同心円文」の工具痕が確認できる。5は磨り石、6は上下と側面に使用痕のある敲き石である。7~9は形状より編み物石と考えられる。10は軽石製の磨り石と考えられる。11も軽石製の凹石で中央とその周辺に



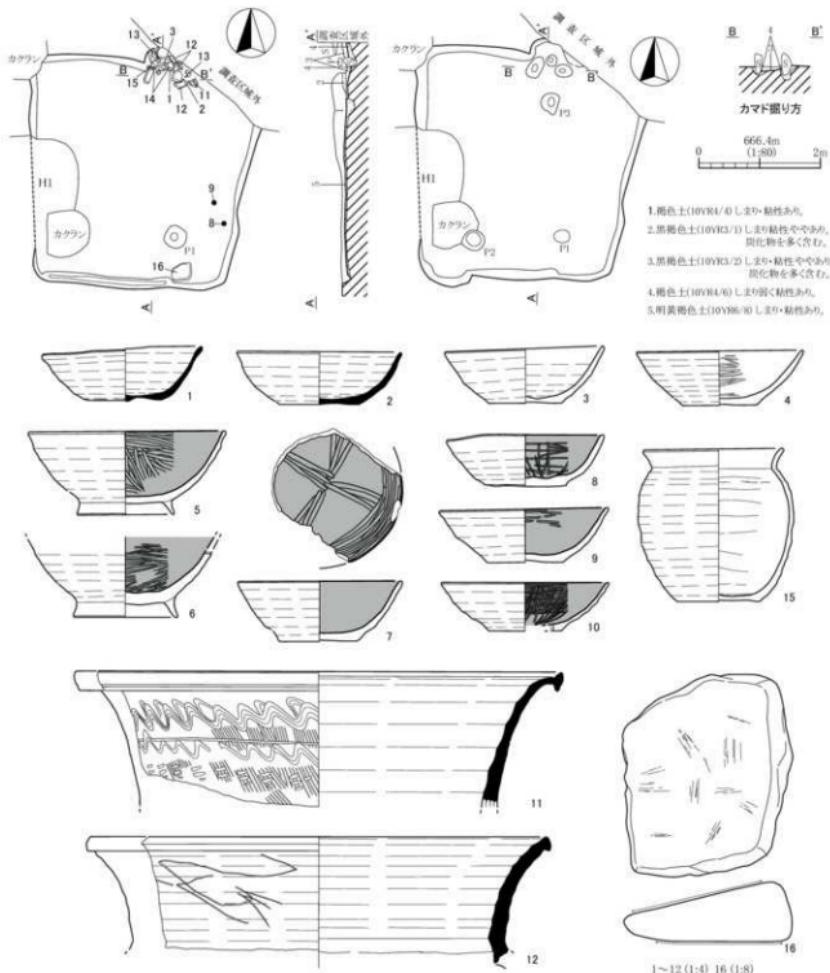
第7図 H 3号住居址及び出土遺物実測図

顕著な凹が確認できる。12は土製の錘である。一部両端が欠損しているが全容を把握できる。13と14は弥生時代の甕で後期箱清水式に対比できる。本址と重複するH 6号住居址の遺物が混入したと考えられる。13は甕の口縁部で、口唇部が折返されている。口縁部には櫛描斜走文が施されている。14は甕の口縁部で、頸部に櫛描横線文、口縁部と胴部に櫛描波状文が施されている。

本址はこれらの出土遺物から8世紀代の所産時期が考えられる。

(4) H 4号住居址

本址は調査地東端で検出された。残存状態は良好であるが、住居北東コーナー部が調査区外となる。形態は方形である。カマドは北壁で検出された。規模は南北長3.64m・東西長3.55mを測る。壁高さは北西コーナー付近で0.20mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを測る。床面積は検出部分で11.19m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.02~0.09mを測る。南壁の一部で壁溝が確認された。規模は幅0.15~0.16m、深さ0.02~0.03mを測る。ピットは掘り方時



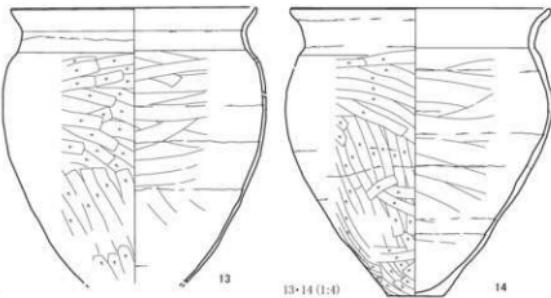
第8図 H4号住居址及び出土遺物実測図

も含め3ヶ所確認された。規模はP1が径0.37m・深さ0.28m、P2が径0.38m・深さ0.41m、P3が径0.35m・深さ0.12mを測る。

カマドは北壁中央に構築されていた。袖部に割ったような川原石を使用しており、支脚石は原位置を保った状態で検出された。この支脚石には3の土師器壺がかぶせたような状態で検出された。また、図示した11～14の須恵器壺や土師器壺がカマド内よりまとめて出土した。顕著な火床部は検出され

なかった。

本址からはカマド内を中心多く出土遺物があった。16点を図示した。1と2は須恵器壺である。5と6は土師器碗でいずれも内面黒色処理されている。3と4と7～10は土師器壺である。3と4以外は内面黒色処理されている。7は見込み部に「十」文字風の暗文が施されている。11と12は須恵器壺の口縁部である。11は口縁部に2段の櫛描波状文が描かれている。最下段の櫛描は列点状の施文に見える



第9図 H4号住居址出土遺物実測図

るが、波状文が施されなかつた結果の形状ともとれる。12は口縁部に施文はないが、図に示したような細いヘラによる刻線が確認できる。この刻線も意図的なものか、偶発的な物かは判断に苦しむ。13と14はいわゆる「武藏甕」と呼ばれる土師器壺である。カマドよりの出土で、ほぼ全容が把握できる。16は台石的な磨り石で、住居址南東コーナー付近の床面上から出土した。両面がよく磨かれている。

本址はこれらの出土遺物から、9世紀前半の所産時期が考えられる。

(5) H5号住居址

本址は調査地西よりで検出された。残存状態は住居中央部と北壁をH3号住居址に削平されている。形態は方形である。規模は残存南北長2.89m・東西長3.32mを測る。壁高さは北東コーナー付近で0.43mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は北壁にカマドが存在したとしてN-13°-Wを測る。床面積は推定で9.54m²を測る。覆土は自然堆積で、床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.08～0.14mを測る。壁溝は検出された壁全体で検出された。幅は0.16～0.20m、深さは0.06～0.11mを測る。ピットは6ヶ所確認され、P1～P4は主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。P1とP2の柱間は1.59m、P2とP3の柱間は1.53mをそれぞれ測る。ピットの規模はP1が径0.34m・深さ0.21m、P2が径0.37m・深さ0.36m、P3が径0.43m・深さ0.36m、P4が径0.34m・深さ0.27m、P5が径0.52m・深さ0.37m、P6が径0.44m・深さ0.30mを測る。住居掘り方はほぼ平坦であった。

本址からの出土遺物は少なかつたが、8点を図示した。1～4は土師器壺である。いわゆる須恵器模倣壺と呼ばれるタイプのもので、2は口唇部がやや内湾する。5～6は土師器甕の部位である。7は6の底部の可能性がある。8は弥生土器の小型甕である。無文である。H6号住居址からの混入遺物と考えられる。

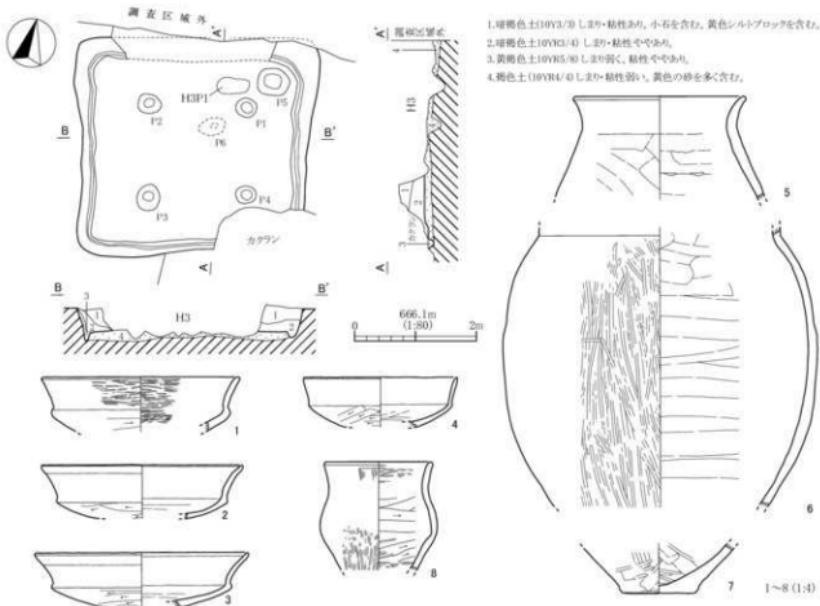
本址はこれらの出土遺物から6世紀前半の所産時期が考えられる。

(6) H6号住居址

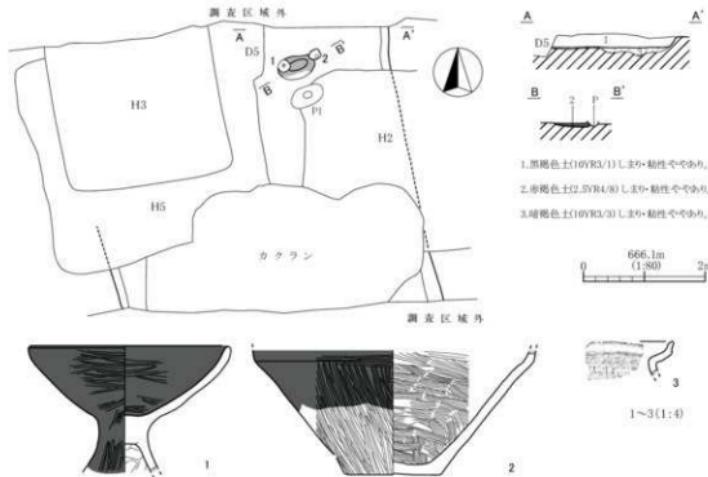
本址は調査地西よりで検出された。残存状態は重複するH2・H3・H5号住居址に削平されており、壁等が一部検出されたに止まる。形態は長方形と考えられる。規模は検出南北長4.59m・残存東西長4.89mを測る。壁高は東壁で0.17mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN-12°-Wを測る。覆土は自然堆積で、床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.01～0.06mを測る。ピットは1ヶ所確認され、規模はP1が径0.56m・深さ0.42mを測る。住居掘り方はほぼ平坦であった。

炉と考えられる焼土範囲を検出した。焼土はよく焼けており、焼土規模の径は0.63m・厚みは0.42mを測る。

本址からの出土遺物は少なかつたが3点を図示した。1は赤彩が施された高壺であり、脚部を欠損

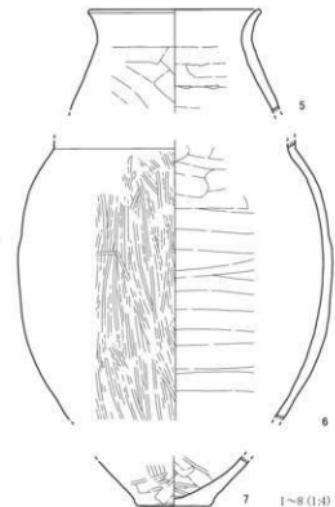


第10図 H5号住居址及び出土遺物実測図



第11図 H6号住居址及び出土遺物実測図

- 1.暗褐色土(10Y3/3)しまり・粘性あり。小石を含む。黄色シルトブロックを含む。
- 2.暗褐色土(10Y3/4)しまり・粘性ややあり。
- 3.黄褐色土(10Y5/8)しまり弱く、粘性ややあり。
- 4.褐色土(10Y4/0)しまり・粘性弱い。黄色の砂を多く含む。



1~8 (1:4)

- 1.黒褐色土(10Y3/1)しまり・粘性ややあり。白色粒子を多く含む。
- 2.赤褐色土(2.5YR4/8)しまり・粘性ややあり。上面よく焼けている。
- 3.暗褐色土(10Y4/0)しまり・粘性ややあり。上面硬化している。

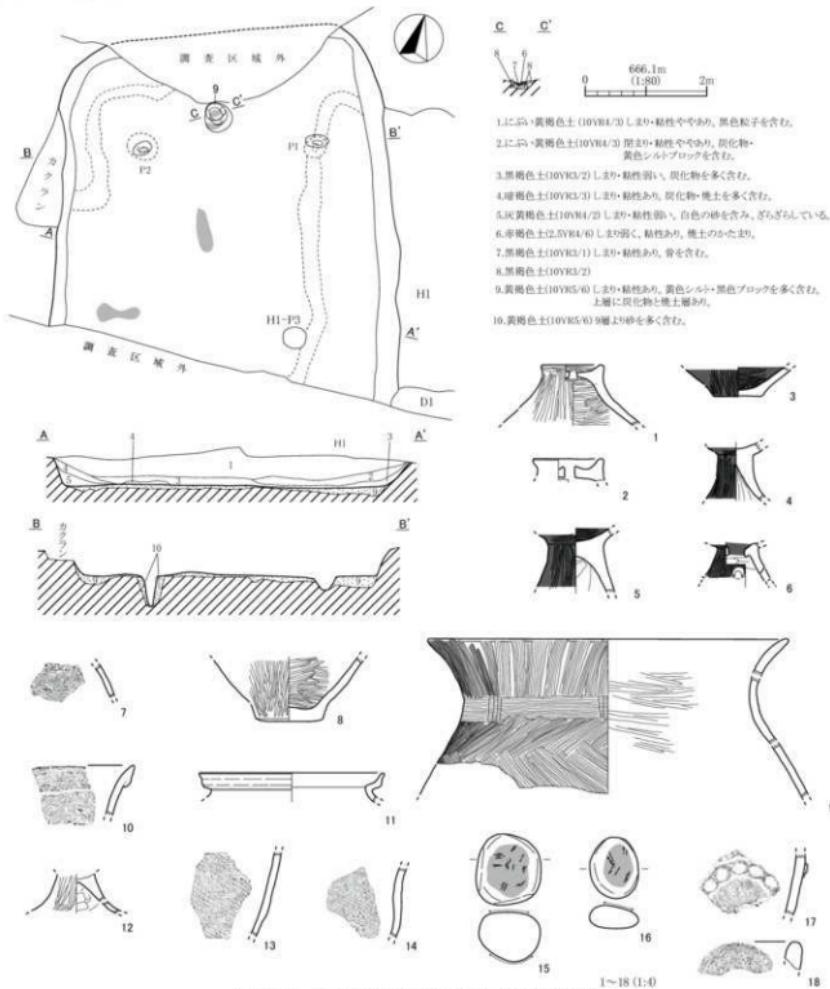
0 666.1m
(1:800)
2m

1~3 (1:4)

する。2は壺の胴部下半から底部であり、外面に赤彩がある。1と2は炉と考えられる焼土脇から出土し、1は伏せた状態であった。3はいわゆる「S字甕」と呼ばれる甕の口縁部である。

本址はこれらの出土遺物から弥生後期箱清水期に比定されると考えられる。

(7) H 7号住居址



第12図 H 7号住居址及び出土遺物実測図

本址は調査地東よりで検出された。残存状態は住居北側と南側が調査区域外となる。形態は長方形と考えられる。規模は検出南北長5.22m・東西長5.10mを測る。壁高さは北東コーナー付近で0.83mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN-15°-Wを測る。床面積は検出部分で23.27m²を測る。覆土は自然堆積であったが、特に壁際を中心に床面上から焼土と炭化物が多く検出され、本址は焼失住居の可能性がある。床は全体に硬質であった。貼床の厚みは0.03~0.14mを測る。ピットは2ヶ所確認され、P1とP2は主柱穴と考えられる。ピットの規模はP1が径0.38m・深さ0.14m、P2が径0.31m・深さ0.50mを測る。住居掘り方は東壁側と北西コーナー付近が一段掘り窪められていた。

炉はP1とP2間のやや北よりで検出された。図示した3の甕口縁部が埋設土器として利用されていた。炉の規模は径0.48mで焼土厚みは0.12mを測る。焼土はよく焼けていた。

本址からの出土遺物は少なかったが、18点を図示した。1と2は蓋である。いずれも天井部に単孔が開けられている。3は小型の鉢である。内外面に赤彩と丁寧なミガキが施されている。4と5は高坏脚部である。赤彩が施されている。6は小型器台の脚部破片である。赤彩が施され、坏部と脚部に円形の穿孔が確認できる。7は壺の頸部破片である。櫛描横線文と櫛描波状文が施されているが、線が細かく箱清水式のそれとは異なる。東海系の影響下か。8は甕の底部付近である。丁寧なミガキが施されている。9は甕の口縁部から頸部である。頸部に4連止めの櫛描簾状文、口縁部に櫛描斜走文、胴部に羽状構成の櫛描斜走文が施されている。10は甕の折り返し口縁部で、櫛描波状文が施されている。11はいわゆる「S字甕」と呼ばれる甕の口縁部である。12は小型台付き甕の脚部と考えられる。13と14は甕の同一個体と考えられ、櫛描斜走文が施されている。15と16は磨り石である。17と18は縄文土器片であり、混入品と考えられる。

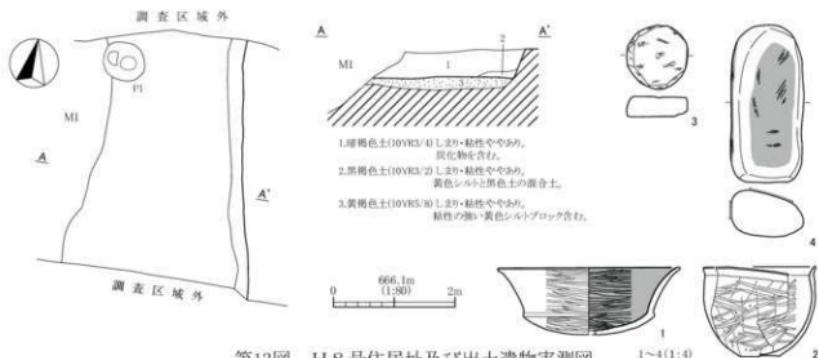
本址はこれらの出土遺物から弥生後期箱清水期の所産時期が考えられる。

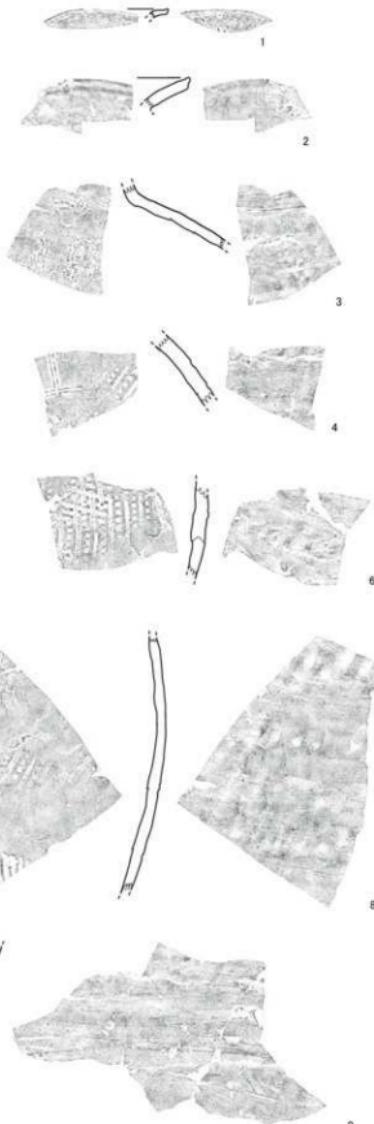
(8) H 8号住居址

本址は調査地西端で検出された。残存状態は住居西がM 1号溝状遺構により削平されている。形態は不明で、規模は検出南北長4.04m・残存東西長2.86mを測る。壁高さは北側で0.52mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面積は検出部分で8.91m²を測る。覆土は自然堆積であった。床は全体に軟質であり、貼床の厚みは0.02~0.20mを測る。ピットは1ヶ所確認され、規模はP1が径0.70m・深さ0.62mを測る。住居掘り方は均一であった。

本址からの出土遺物は少なく、4点を図示したに止まった。1は土師器壺で内面を黒色処理されている。2は小型の鉢とすべきか。3は軽石製の円版で、用途は不明。4は磨り石である。

本址はこれらの出土遺物から古墳時代後期の所産と考えられる。





第14図 Ta 1号竖穴状遺構及び出土遺物実測図

1~9 (1:4)

2. 壺穴状遺構

(1) Ta 1 号壺穴状遺構

本址は調査区北側で検出された。南側以外は調査区域外となる為、遺構の全容は不明である。本址の周囲には覆土が同一のピットが検出された為、同一の図面に掲載した。規模は南北の検出長が2.40m、東西の検出長が1.60mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、壁高さは0.10～0.28mを測る。遺構底面はすり鉢状で、貼床等は確認できなかった。底面からは焼土と炭化物が検出されている。

本址からの出土遺物は覆土上面を中心に出土した。破片資料であるが9点を図示した。いずれも涅美窯の製品の可能性があり、二次焼成を受けている破片も多かった。2と7と9は甕、その他は壺か瓶と考えられる。1と3は釉薬が非常に掛かっていた。4は胴部上半の肩部付近の破片で、施文具を用いた刻文が確認できる。いわゆる袈裟襷文の一部と考えられる。また、4から9は外面に押印文が確認できる。4～6と8は格子文、7と9は縦線文に分類できる。

本址はこれらの出土遺物から12世紀の所産時期が考えられる。

3. 土坑

(1) D 1号土坑

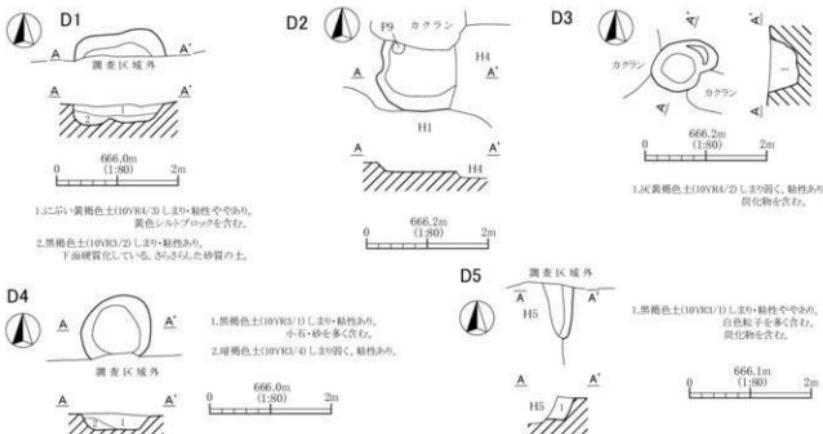
本址は調査地中央で検出された。残存状態は南側が調査区域外となる。形態は不明である。規模は検出された長軸長1.50m・深さ0.33mを測る。本址からの出土遺物は土師器壺・甕片や弥生土器片があつたが小片の為図示できなかつた。

(2) D 2号土坑

本址は調査地中央で検出された。形態は不明である。規模は残存長軸長1.52m・深さ0.21mを測る。本址からの出土遺物は土師器甕片、須恵器甕片、弥生土器甕片があつたが小片の為図示できなかつた。

(3) D 3号土坑

本址は調査地中央で検出された。形態は不整形である。規模は長軸長1.10m・深さ0.48mを測る。本址からの出土遺物はいわゆる「武藏甕」と呼ばれる土師器甕片、弥生土器甕片があつたが小片の為図示できなかつた。



第15図 D 1～5号土坑実測図

(4) D 4号土坑

本址は調査地中央南よりで検出された。形態は円形と考えられる。規模は長軸長1.25m・深さ0.27mを測る。本址からの出土遺物はなかった。

(5) D 5号土坑

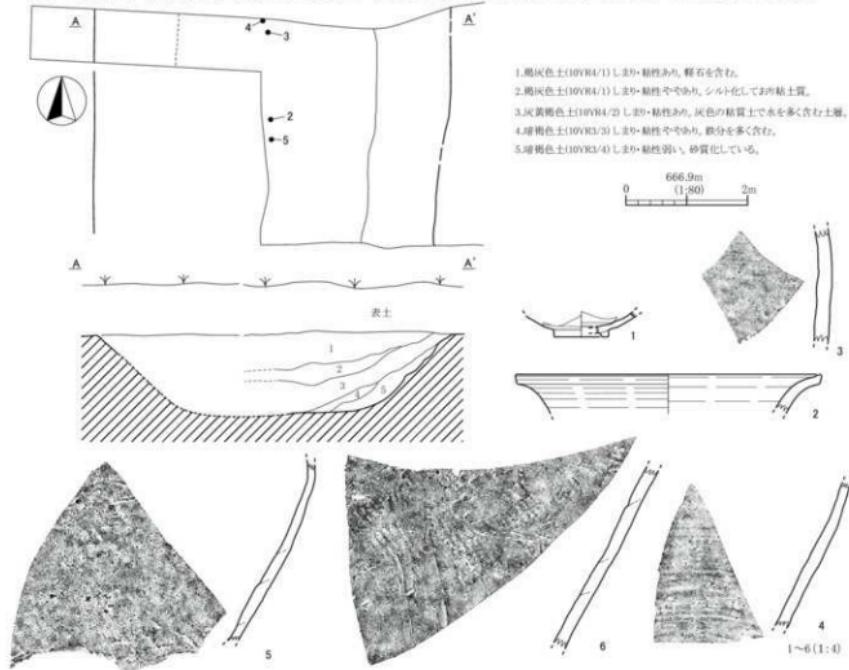
本址は調査地西よりで検出された。形態は不整形である。規模は残存長軸長0.97m・深さ0.37mを測る。本址からの出土遺物はなかった。

4. 溝状遺構

(1) M 1号溝状遺構

本址は調査区西端から検出された。南北方向に延びる溝状遺構で、西側の遺構立ち上がりは、水道管敷設時の立合いで確認した。検出された長さは3.80mを測る。規模は幅5.48m、深さ1.26mを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形態は逆台形である。溝底面は平坦であり、覆土は自然堆積であったが、溝下層には人頭大以上の川原石が意図的に投げ込まれたような状態で出土した(図版3参照)。

本址からの出土遺物は、先に述べた礎中より多く出土した。6点を図示した。1は白磁碗で、VII類で12世紀後半。2は東濃系の広口壺口縁部と考えられ、形状より12世紀代が考えられる。3と4は同一個体の破片と考えられ、東濃系の製品と考えられるが、器種は不明である。5は常滑の壺破片



第16図 M 1号溝状遺構及び出土遺物実測図

と考えられる。6は甕の胴部破片であり、外面に縦線文状の押印が確認できる。

本址からの出土遺物は少なく、不確実ではあるが12世紀代に比定されると考える。

5. ピット

今回の発掘調査では14ヶ所の単独ピットを検出した。いずれも規模が小規模で、形態も不整形が多くかった。調査面積の制約から、掘立柱建物址や柵列と認識できるものはなかったが、P13～15はM1号構造遺構に関係する柵列とも捉えられる。また、P1～12は覆土に炭化物が多く混入し、Ta1号竪穴状遺構との関連が推測できる。ピットからの出土遺物はいずれも小片で図示可能なものはなかった。

第1表 ピット計測表

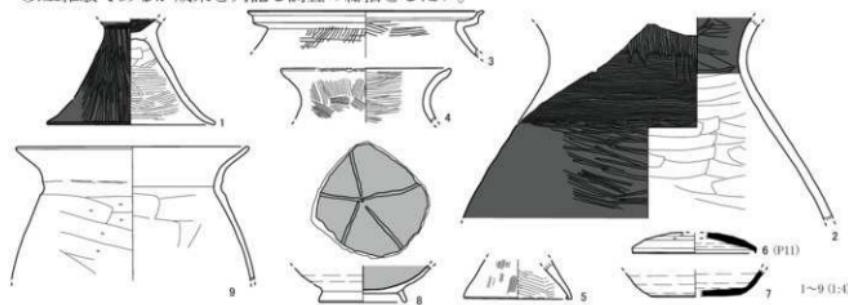
遺構名	出土位置	長径	短径	深さ	形態	出土遺物	重複関係	(推定) 現存 (単位 cm)		
								遺構名	出土位置	長径
P1	エ-3	37.5	27.5	26.0	橢円形	乳頭器便 弥生	炭化物あり	P9	エ-3	43.0 (39.5)
P2	エ-3	36.4	22.4	30.0	橢円形		炭化物あり	P10	エ-2・3	105.6 87.2 29.0
P3	エ-3	36.0	25.3	12.0	方形		炭化物あり	P11	エ-3	90.8 (50.0)
P4	エ-2	63.2	(36.1)	29.0	—	変形 乳頭器便	炭化物あり	P12	エ-3	36.3 32.9 30.0
P5	エ-4	29.7	24.2	17.0	方形	D2上ノ新 土師器跡	炭化物あり	P13	エ-4	45.8 40.6 21.0
P6	エ-3・4	54.0	42.0	25.0	橢円形	H4上ノ新	炭化物あり	P14	タ-4・5	44.7 37.3 22.0
P7	エ-3	41.2	39.4	9.0	円形		炭化物あり	P15	タ-5	49.7 43.7 42.0

第III章 調査の総括

今回の発掘調査は根々井住居敷遺跡の全容を知るうえで貴重な発掘調査となった。まず、第1点目として弥生後期窓穴住居址が2軒発見された事である。1次では集落を囲む環濠の一部が発見され、今回の調査により、根々井に立地する沖積地の湯川寄りに弥生集落が存在することが判明した。また、今回の調査前に行われたII次でも弥生時代の住居址が1軒発見され、集落の広がりを想定する資料成果となっている。

次に第2点目としてM1号構造遺構の発見とTa1号竪穴状遺構出土の涅美窯製品がある。M1は検出された状況から、規模が幅4.5m、深さ2.1mで南北方向に延びることが確認された。これらの事を踏まえると本溝跡の性格は、館等を区画する溝の可能性が高い。出土遺物は、白磁碗や東濃系の壺破片があり、時期は12世紀代と考えられる。また、Ta1から出土した涅美窯製品は今回佐久地域で初見となる。器種は甕と壺があり、12世紀代の製品と考えられる。操業期間も短く、製品も少ない涅美窯製品の出土は本遺跡の特殊性を示していると言える。以上のような状況は、本遺跡に近接する県史跡「根々井氏館跡」にこれら遺構・遺物が関連するとも捉えられ、今後非常に注目される調査事例となると思われる。

以上雑駁であるが成果を列記し調査の総括としたい。



第17図 遺構外出土遺物実測図

HI	種類	器種	法 量			成形・調製・文様・焼考			測定方法	出 位 置	
			口巻(巻)	底巻(幅)	巻高(厚)	内 面	外 面				
1	灰釉陶器	盤	(14.0)	8.0	2.8	ロクロナダ・施釉・ハケ盛り	ロクロナダ→三月萬古台付 施釉・ハケ盛り	回転実測	Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区・Ⅴ区付近		
2	灰釉陶器	盤	(16.0)	9.0	3.4	ロクロナダ・施釉	ロクロナダ→萬古台付 施釉・ハケ盛り	回転実測	I・Ⅳ区・Ⅴ区付近		
3	灰釉陶器	盆皿	(16.2)	7.3	3.5	ロクロナダ・施釉・ハケ盛り	ロクロナダ→三月萬古台付 施釉・ハケ盛り	回転実測	I区・H7臺区		
4	灰釉陶器	碗	15.1	-	(3.1)	ロクロナダ・施釉	ロクロナダ・施釉・ハケ盛り	回転実測	I区・I区付近・II区		
5	灰釉陶器	便	-	-	9.0	(16.0)	ロクロナダ・自然釉	ロクロナダ・底部丸切り→三月萬古台付 施釉	回転実測	I区・H4-P2・O4P	
6	灰釉陶器	便	(10.3)	-	(6.5)	ロクロナダ・自然釉	ロクロナダ・自然釉	回転実測	Ⅴ区付近		
7	土器器	碗	(10.0)	6.0	4.9	ハラシガタ・黑色処理	ロクロナダ・底部丸切り→萬古台付・ハラシガタ・黑色処理	回転実測	I区		
8	土器器	碗	(12.0)	8.0	6.1	ハラシガタ・黑色処理	ロクロナダ・萬古台付	回転実測			
9	土器器	碗	14.6	-	5.0	ハラシガタ・黑色処理	ロクロナダ・萬古台付底部丸切り→萬古台付	完全実測	I区		
10	土器器	碗	-	(4.0)	(1.4)	ナデ・黑色処理	ナデ・黑色処理	回転実測	I区		
11	土器器	碗	13.4	6.0	4.2	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面円弧底部・ハラシガタ	完全実測	I区付近		
12	土器器	碗	13.1	7.0	3.9	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	完全実測	I・IV区・I・II区付近		
13	土器器	碗	12.7	4.7	3.4	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面ヘラカズリ	完全実測			
14	土器器	碗	(14.0)	8.0	3.9	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ	回転実測			
15	土器器	碗	12.7	6.4	4.5	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ナデ	完全実測			
16	土器器	碗	12.0	5.7	3.6	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面・ハラシガタ	完全実測	Ⅱ区・Ⅴ区付近		
17	土器器	碗	12.3	5.5	3.9	壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	完全実測	Ⅴ区付近		
18	土器器	碗	(12.0)	5.7	5.0	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	回転実測	I区		
19	土器器	碗	(12.0)	3.7	4.1	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	回転実測	I区付近		
20	土器器	碗	12.0	5.3	4.1	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	完全実測	I区・I区付近		
21	土器器	碗	(14.0)	6.1	3.7	ハラシガタ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	回転実測	I区		
22	土器器	碗	(11.0)	6.0	4.2	ロクロナダ・壁文・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	回転実測	I区・カマド		
23	土器器	碗	12.0	6.0	3.6	ロクロナダ	ロクロナダ・底面右側丸切り	完全実測	I区		
24	土器器	碗	14.0	6.1	3.7	ロクロナダ	ロクロナダ・底面右側丸切り	完全実測	Ⅱ区		
25	土器器	碗	13.8	5.6	3.5	ロクロナダ	ロクロナダ・底面右側丸切り	完全実測	Ⅱ区		
26	土器器	碗	14.3	7.0	3.7	ロクロナダ	ロクロナダ・底面右側丸切り	完全実測	Ⅱ区		
27	土器器	碗	12.6	6.9	3.7	ロクロナダ	ロクロナダ・底面右側丸切り	完全実測	Ⅱ区		
28	土器器	碗	(13.0)	5.8	3.9	黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	回転実測	Ⅱ区・Ⅴ区付近		
29	土器器	碗	(13.2)	6.1	4.4	ハラシガタ・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	回転実測	I区		
30	土器器	碗	(13.0)	6.0	4.1	ロクロナダ・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り・保有者	回転実測	Ⅱ区付近・カマド		
31	土器器	碗	(14.0)	6.0	4.2	ハラシガタ・黑色処理	ロクロナダ	回転実測	Ⅱ区付近・カマド		
32	土器器	碗	(15.0)	7.0	5.1	ハラシガタ・黑色処理	ロクロナダ・底面右側丸切り	回転実測	I・II区・カマド		
33	土器器	碗	(14.0)	8.2	12.0	ロクロナダ	ロクロナダ・底面右側丸切り	回転実測	カマド		
34	土器器	便	-	(8.0)	(4.2)	ロクロナダ	ロクロナダ・ハラシガタ	回転実測	Ⅱ区		
35	土器器	便	(17.0)	-	(14.0)	ロクロナダ	ロクロナダ	回転実測	Ⅱ区・カマド		
36	土器器	便	(21.0)	-	(6.6)	ロクロナダ	ロクロナダ	回転実測	Ⅱ区		
法 量			島大長	島大幅	島大厚	備 考			出 位 置		
No	器 様	素 材	島大長	島大幅	島大厚	重 量					
37	織物石	安山岩	12.0	9.2	3.7	331.0	被熱なし・すり面				
38	織物石	安山岩	22.2	11.4	9.8	4.1	672.6	被熱なし・すり面			
H2	種類	器種	法 量			成形・調製・文様・焼考			測定方法	出 位 置	
			口巻(巻)	底巻(幅)	巻高(厚)	内 面	外 面				
1	灰釉陶器	蓋	(14.0)	-	(2.0)	ロクロナダ	ロクロナダ・自然釉付着	ロクロナダ・自然釉付着	回転実測	I区	
2	灰釉陶器	蓋	(14.0)	-	(2.0)	ロクロナダ	ロクロナダ・自然釉付着	ロクロナダ・自然釉付着	回転実測	Ⅲ・IV区	
3	土器器	便	-	-	(8.0)	(8.0)	ハラシガタ	ハラシガタ・ハラカズリ・底面ハラカズリ	回転実測	Ⅱ区	
4	土器器	便	-	-	(4.0)	ロクロナダ	ロクロナダ・二つ丸自然釉付着	ロクロナダ・二つ丸自然釉付着	回転実測	I・II区	
H3	種類	器種	法 量			成形・調製・文様・焼考			測定方法	出 位 置	
			口巻(巻)	底巻(幅)	巻高(厚)	内 面	外 面				
1	灰釉陶器	蓋	-	-	(4.0)	ロクロナダ	ロクロナダ・天井斜面付・ハラカズリ	ロクロナダ・天井斜面付・ハラカズリ	完全実測	I区	
2	灰釉陶器	蓋	(14.0)	-	(4.0)	ロクロナダ	ロクロナダ・底面切跡・下唇	ロクロナダ・底面切跡・下唇	回転実測	Ⅱ区	
3	灰釉陶器	蓋	-	-	(9.0)	(4.0)	ロクロナダ・二つ丸自然釉付着	ロクロナダ・二つ丸自然釉付着	回転実測	Ⅱ区・H7臺区	
4	灰釉陶器	便	-	-	-	純心式文 当て其瓶	タリキテ	破片実測	I区		
13	灰生	便	-	-	-	ハラシガタ・多筋付着	被熱付着	破片実測	Ⅱ区		
14	灰生	便	-	-	-	ハラシガタ	被熱付着文 横溝縞文	破片実測	Ⅱ区		
法 量			島大長	島大幅	島大厚	重 量			出 位 置		
No	器 様	素 材	島大長	島大幅	島大厚	重 量					
5	織物石	安山岩	15.5	7.4	5.0	795.6	被熱なし・すり面				
6	織物石	安山岩	17.7	6.4	4.4	937.4	被熱なし・両端面と右側面に最打痕				
7	織物石	安山岩	(11.0)	7.1	3.1	(201.0)	被熱なし・底部欠損				
8	織物石	砂岩	11.0	2.9	4.0	260.0	被熱なし				
9	織物石	安山岩	10.7	5.3	3.3	255.3	被熱なし				
10	織物石	絆石製品	4.1	4.2	3.1	27.0	被熱なし・全体にすり				
11	圓石	多孔質安山岩	2.4	21.5	12.0	3.8kg	被熱なし・同様2.4~9.6圓石10全體に形態の為にすり有り・正面に2.4~所打上に縫合あり、				
12	土塊	土製品	(5.0)	2.3	1.9	(22.2)	丸径0.35~0.40 厚さ既知付 ナグ 造成用骨材				

H4	種別	器種	法 量				成形・調製・文様・書き		実測方法	出 土 位 置
			口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面			
1	直筒器	瓶	13.3	6.6	4.6	ロクロナダ	ロクロナダ→底部右側斜め切欠	完全実測	I 区、カツリ	
2	直筒器	瓶	13.0	6.0	4.4	ロクロナダ	ロクロナダ→底部右側斜め切欠	回転実測	カツリ	
3	土師器	井	13.2	3.9	4.7	ロクロナダ	ロクロナダ→底部右側斜め切欠	完全実測	カツリ	
4	土師器	井	13.0	18.1	4.5	ヘラシガキ	ロクロナダ→底部右側斜め切欠	回転実測	カツリ	
5	土師器	瓶	16.0	8.6	6.9	ヘラシガキ→黒色焼成	ロクロナダ→底部右側斜→高台輪付	完全実測	I 区 P1	
6	土師器	瓶	-	8.6	(6.6)	ヘラシガキ→黒色焼成	ロクロナダ→底部右側斜→高台輪付	完全実測	カツリ	
7	土師器	井	13.0	6.5	5.6	鉢文→ヘラシガキ→黒色焼成	ロクロナダ→底部右側斜→裏斜	完全実測	I 区	
8	土師器	井	13.0	6.7	4.3	ヘラシガキ→黒色焼成	ロクロナダ→底部右側斜→ナデ	完全実測	I 区	
9	土師器	井	14.0	6.2	4.5	ヘラシガキ→黒色焼成	ロクロナダ→斜面	完全実測	I 区	
10	土師器	井	13.0	18.0	4.6	ヘラシガキ→黒色焼成	ロクロナダ→底部右側斜め切欠→横行筋	回転実測	カツリ	
11	直筒器	瓶	28.0	-	(11.2)	ロクロナダ	タクナ口→底面	回転実測	カツリ ライド	
12	直筒器	瓶	27.0	-	(10.0)	ロクロナダ	ロクロナダ→刻面あり	回転実測	カツリ	
13	土師器	瓶	26.2	-	(22.6)	ナダ	ヘラシグリ	回転実測	カツリ ウイGr	
14	土師器	瓶	21.0	4.5	23.7	ナダ	ヘラシグリ	完全実測	カツリ	
15	土師器	瓶	11.0	6.8	12.7	ナダ	ロクロナダ→底部右側斜め切欠	完全実測	カツリ	
No.	器種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出 土 位 置	
16	白石	海灰石	33.4	28.0	10.0	13.0kg	被燃なし、使用歴2			
H5	種別	器種	法 量				成形・調製・文様・書き		実測方法	出 土 位 置
			口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面			
1	土師器	井	16.0	10.0	(4.5)	ヘラシガキ	ヘラシガキ→底部→ラケツリ	回転実測	II 区	
2	土師器	井	16.0	10.0	(4.5)	白羅ヨコナダ→ナラナダ	白羅ヨコナダ→ラケツリ	回転実測	II 区 作区	
3	土師器	井	17.0	10.0	(4.5)	ヘラナダ	白羅ヨコナダ→ラケツリ	回転実測	II 区 作区	
4	土師器	井	12.0	10.0	(4.5)	白羅ヨコナダ→ナラナダ	白羅ヨコナダ→ラケツリ	回転実測	II 区 作区	
5	土師器	瓶	14.2	-	(8.5)	ナダ	ヘラシグリ	回転実測	II 区	
6	土師器	瓶	-	-	(23.0)	ヘラナダ	ヘラシグリ	回転実測	IV 区	
7	土師器	瓶	-	8.0	(5.1)	ヘラシガキ→ヘラシガキ	ヘラシガキ→底部に木質箋あり	回転実測	II 区 作区	
8	陶生	素 材	-	(8.0)	ヘラシグリ→ヘラシキ	ヘラシグリ→ヘラシガキ	回転実測	II 区		
No.	器種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出 土 位 置	
17	種別	器種	法 量				成形・調製・文様・書き		実測方法	出 土 位 置
H6	種別	器種	口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	実測方法	出 土 位 置	
			口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面			
1	陶生	高井	16.6	-	(10.0)	片端→へたり	赤彩 剥離→ウナナダ	ヘラシキモ 赤彩	完全実測	
2	陶生	高	-	8.0	(10.2)	ハケ目	ハクナキモ 赤彩	完全実測		
3	陶生	高	-	-	-	ハケ目	ハクナキモ	破片実測		
No.	器種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出 土 位 置	
18	陶生	素 材	-	-	-	-	-			
No.	器種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出 土 位 置	
15	粗粒石	砾灰岩	5.9	5.3	4.1	169.7	被燃なし、寸幅2		I 区	
16	粗粒石	安山岩	5.1	4.0	1.9	93.3	被燃なし、寸幅2		I 区	
H8	種別	器種	法 量				成形・調製・文様・書き		実測方法	出 土 位 置
			口径(高)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面			
1	土師器	井	15.0	10.0	(5.0)	ヘラシガキ	黒色焼成	ヘラシガキ	回転実測	I 区
2	土師器	井	15.0	10.0	(5.0)	ヘラシガキ	ヘラシガキ	回転実測	II 区 夏区	
No.	器種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出 土 位 置	
3	石製内盤	粘石	5.3	5.0	1.7	22.6	被燃なし、用途不明		I 区	
4	粗粒石	安山岩	13.0	6.0	4.2	905.1	被燃なし、寸幅2		I 区	

TaI	種別	器種	法量			成形・調整・文様		実測方法	出土位置	発地 時代 備考
			口径(直)	底径(幅)	高さ(厚)	内面	外面			
1	陶器	壺・瓶?	-	-	-	無縫	無縫	磁力実測	ケン	高美の可能性 12世紀代
2	陶器	壺	-	-	-			磁力実測	背区	高美の可能性
3	陶器	壺・瓶?	-	-	-			磁力実測	腹区	高美の可能性
4	陶器	壺?	-	-	-	当て其底→ナダ	タリキ目 斜文の一種 指印文	磁力実測	試掘	高美の可能性
5	陶器	壺・瓶?	-	-	-	当て其底→ナダ	タリキ目 指印文	磁力実測	ケン	高美の可能性
6	陶器	壺・瓶?	-	-	-	当て其底→ナダ	タリキ目 指印文	磁力実測	背区 試掘	高美の可能性
7	陶器	壺	-	-	-	当て其底→ナダ	タリキ目 指印文	磁力実測	ケン	高美の可能性
8	陶器	壺・瓶?	-	-	-	当て其底→ナダ	タリキ目 指印文	磁力実測	1区 試掘	高美の可能性
9	陶器	壺	-	-	-	ナダ	タリキ目→ナダ 指印文	磁力実測	ケン	高美の可能性

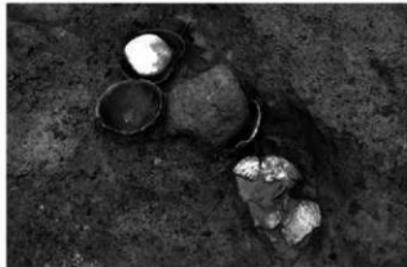
M1	種別	器種	法量			成形・調整・文様		実測方法	出土位置	発地 時代 傷考
			口径(直)	底径(幅)	高さ(厚)	内面	外面			
1	石器	網	-	0.3	(3.1)	集散(中央凹孔)	無縫	10枚実測	1区	蝶原 12世紀後半
2	陶器	広口壺	(25.0)	-	(3.2)	ロクロナダ	ロクロナダ	回転実測		東濃 12世紀代
3	陶器	壺?	-	-	-	ナダ	ナダ	磁力実測		東濃
4	陶器	壺?	-	-	-	ナダ	ナダ	磁力実測		東濃
5	陶器	壺	-	-	-	ナダ	ナダ	磁力実測		東濃
6	陶器	壺	-	-	-	ナダ	ナダ	磁力実測		足利 小

Gr	種別	器種	法量			成形・調整・文様・備考		実測方法	出土位置	発地 時代 傷考
			口径(直)	底径(幅)	高さ(厚)	内面	外面			
1	陶生	壺	-	13.8	(8.2)	片割ハラヒガキ 巻筋 鋼部ハケ目	ハラヒガキ 巻筋	完全実測	=3Gr	
2	陶生	壺	-	-	(9.2)	ハラナダ→縫割ハラヒガキ 巻筋	ハラヒガキ 巻筋	回転実測	=3Gr	
3	陶生	壺	(19.0)	-	(3.0)	ハケ目	ハケ目 縫一極丸向	回転実測	=3Gr	
4	陶生	壺	(14.0)	-	(3.5)	ハケ目→ハラヒガキ	ハケ目 片唇剥落あり	回転実測	=3Gr	
5	陶生	壺	-	10.0	(3.2)	ハケ目	ハケ目	回転実測	=3Gr	
6	瓦窯器	壺	(10.2)	-	(1.7)	ロクロナダ	ロクロナダ 天井部分剥離ハケアリ	回転実測	FII	
7	瓦窯器	片	-	7.0	(2.2)	ロクロナダ	ロクロナダ 底面凹凸ハラヒガキ	回転実測	=3Gr	
8	土器器	壺	-	7.2	(3.0)	時文 黒色処理	ロクロナダ 底面削除→直行粘付	完全実測	=3Gr	
9	土器器	壺	(19.2)	-	(11.8)	ハラナダ	ハラナダ	回転実測	=3Gr	

図版1



H 1号住居址

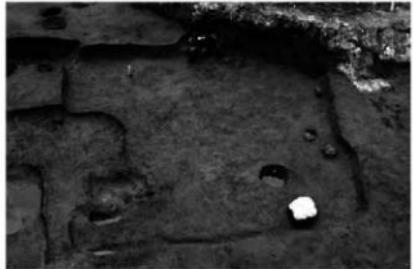


H 1号住居址遺物出土状況



H 2号住居址





H 4号住居址



H 4号住居址カマド



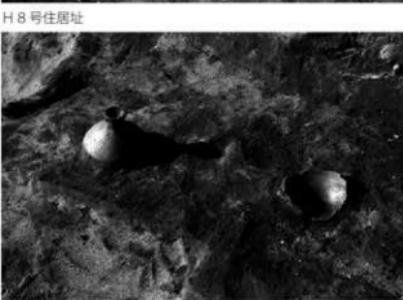
H 5号住居址



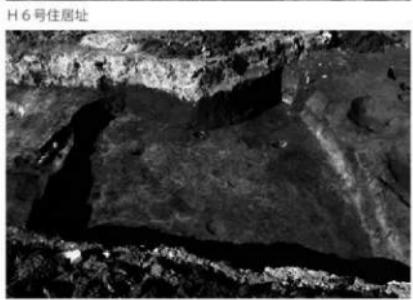
H 8号住居址



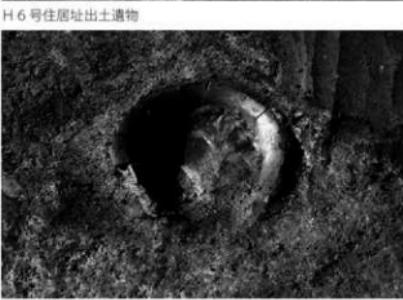
H 6号住居址



H 6号住居址出土遺物

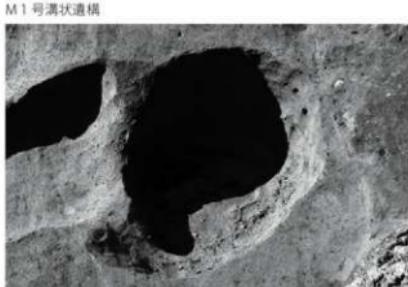
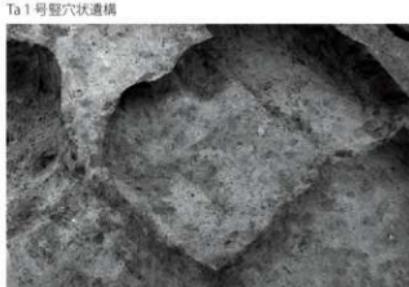
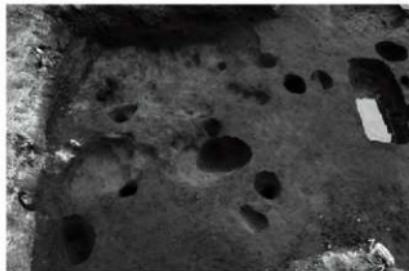


H 7号住居址

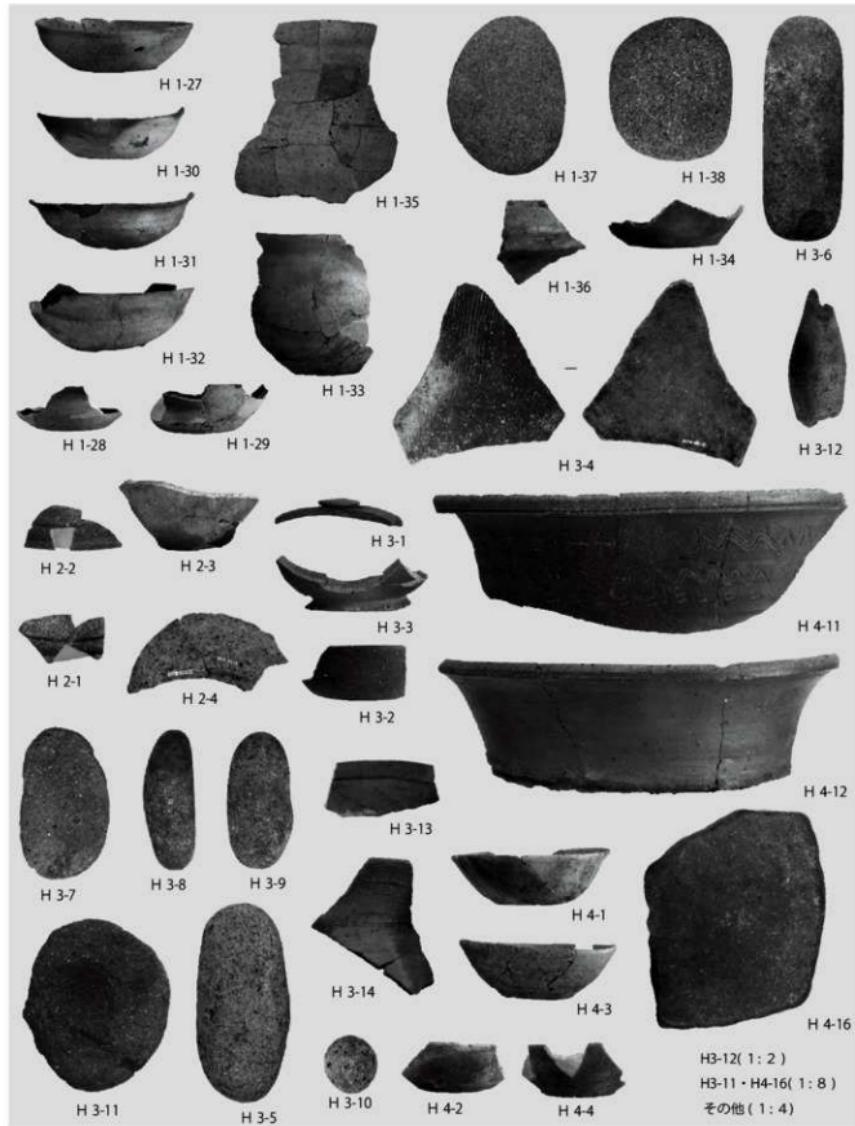


H 7号住居址炉

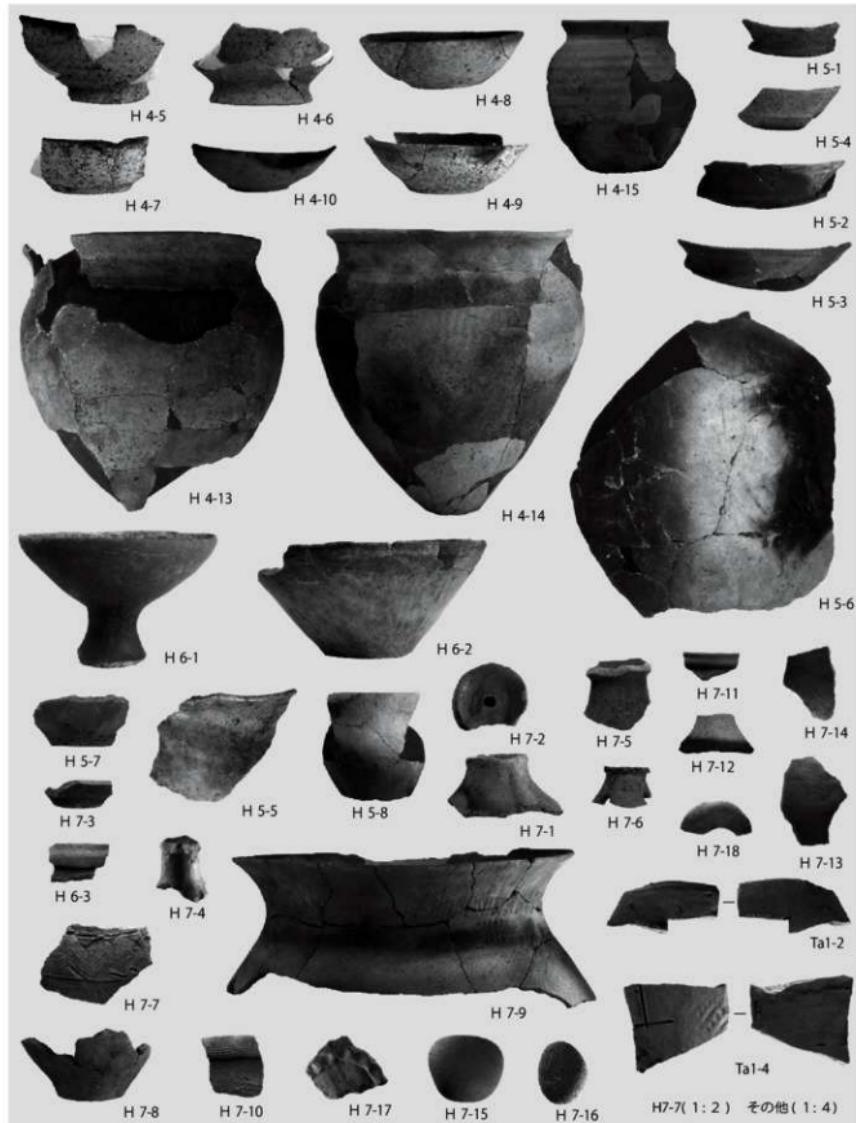
図版3



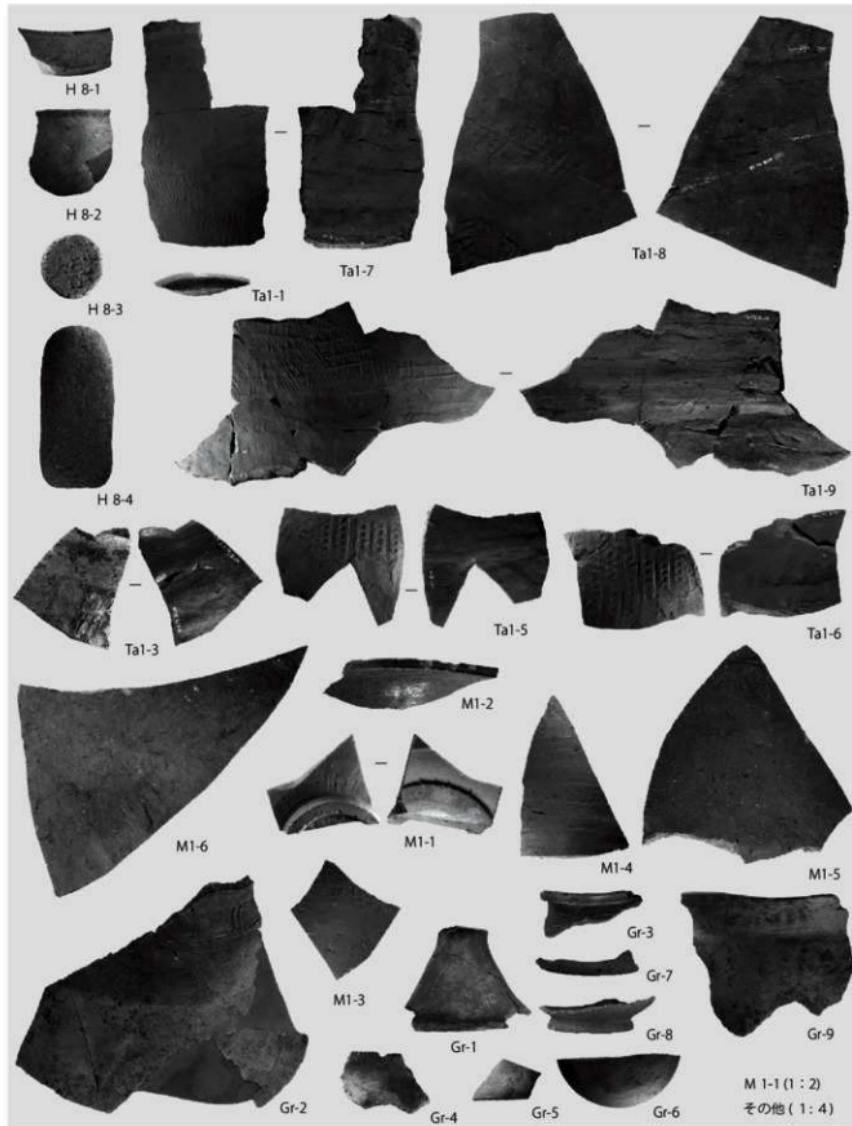
図版4



図版5



図版6



報告書抄録

ふりがな	ねねいいやしきいせきさん							
書名	根々井居屋敷遺跡III							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第301集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	2024年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ねねいいやしき いせきさん 根々井居屋敷遺跡III	さくしぬねい 佐久市根々井 574-1.2.3	20217	94	36°15'	138°27'	2022.10.05 ～ 2022.10.27	200	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
根々井居屋敷遺跡III	集落跡	弥生 古墳 平安	堅穴住居址 8軒 堅穴状遺構 1基 溝状遺構 1本 土坑 5基	弥生土器 土師器 須恵器 灰釉陶器 陶磁器類 土製品				
要約	湯川を望む冲積微高地を発掘調査した。その結果、周辺部の調査事例を補強する古墳時代と平安時代と考えられる堅穴住居群が検出された。特に今回、根々井居屋敷遺跡内で弥生時代後期の住居跡が2軒検出され、集落の広がりを推定できた。また、12～13世紀代の大型溝状遺構も発見された。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第301集

根々井居屋敷遺跡III

2024年 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク有限会社